

小さい頃。そういつてごまかすことはできるけど、明言しよう。

小学生の頃まで、蟻の巣を見つけると決まって残酷なことをした。無邪気というにはあまりあるほどに効率的で、その有様を見て楽しんでた。

残酷なこと、というのは蟻の巣に水を流し込んだり、虫眼鏡で出入り口に日光を集中させたり、他の巣の蟻を連れてきてリンチさせるなどだった。……あとはビスケットで違う巣の蟻どうしを一カ所に釣り出して戦争のようなものを行わせたりもした。

大人になった今でもよく覚えてる。今になって罪悪感を覚える。

そんな話を初めて誰かに話した。

「ハハっ、キミ、いつかニュースに出そうだな」

遠回しに、いつか殺人を犯しそうだ、と言ってきたのは、初めて小学生の頃の悪行を話したのは、旅行先で入った居酒屋で出会った電気工のおっさんだった。

「でもまあオレも子供の頃は同じようなことしてたぜ」

「蟻の巣への水攻めとかですか」

訊いてからビールジョッキをあおる。呉服姿の女将さんにおかわりをお願いする。いい飲みっぷりね、と言いなながらジョッキを持っていく。楽しいので、と答える。

「それのだが、ヒキガエルの口に爆竹詰め込んで、肉花火とか言って投げてたな」

むせた。ごほごほと言っているうちにきれいに注がれたビールジョッキが置かれる。ありがとうございます、と一通りむせてから言った。

そして口もとを引きつらせながら。

「比較にならない残酷さじゃないですか」

「ガハハ、そうかあ？」

疑問に思うまでもなくそうだろ。

「おれの話なんてかわいいものじゃないですか」

「かもな。だからそう思い悩む必要なんてないだろ」

そう言われて胸がすっと軽くなったような感じがした。

不意に視線が合う。何を示し合わせるわけでもなく、何度目かの乾杯をする。

「たしかに君のは陰湿というカンジがするけどな」

「鉄二さんの派手さには劣りますよ」

「ガハハハッ、ちがいないえな」

そしてそんな軽口をたたき合った。

それから何杯かおかわりして、からあげとギョーザと山菜のてんぷらを食べた。どれもおいしかった。やがて皿が空になり、互いの黙るタイミングが被った。虫の音と、隣の店から聞こえる笑い声だけが聞こえた。今後もう二度と会わないであろう鉄二さんは「じゃあな」と言っって先に店を出ていった。寂しくも、充たされた。腹も心も。……ああ、いい人生だ。